

<文献紹介>山本茂 著『クオ・ヴァディス・ポーランド：ポーランド地理学研究』

KOHARA, Takeaki / 小原, 丈明

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

84

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

2016-03-18

【文献紹介】

山本 茂 著 (2015 年)

「クォ・ヴァディス・ポーランド—ポーランド地理学研究—」, 開成出版, 318p

本書は、著者がこれまでにポーランドについて著した多くの論考がまとめられたものである。それら論考の多くは執筆された当時の内容のまま再録されていることから、形式的には著者一人によるポーランドに関する論文集としての色彩が濃い。

また本書は、著者が1970年代初めより長年にわたり、研究対象地域としてだけでなく学びの場(留学先)として、そして生活の場として深く関わってきたポーランドについて記されており、換言すれば、本書には著者の研究史が示されているだけでなく、人生の足跡の一部が著されているといっても過言ではない。

それゆえ、本書にはいくつかの側面があるといえる。第1に、地理学者によって著されたポーランド地誌の専門書としての側面である。ポーランドに関する様々な事象について時間的視座および空間的視座から分析・考察が行われている。扱われている事象のテーマは多岐にわたっており、地理学という学問の幅広さを表しているだけでなく、著者の関心の広さが示されているといえよう。ただし、本書は単なる地誌にとどまらず、ポーランドの地域開発や地域政策、国内政治、国際関係などについては鋭敏に掘り下げた考察がなされており、社会科学の専門書としての性格もある。

第2に、各時代のポーランド社会のルポルタージュとしての側面が指摘できる。論考の中にはデータに基づく客観的な分析よりも、著者が目撃した事柄や感じた印象・感想など実体験に基づいて主観的に記されたものも多い。それゆえ、一歩退いた視点で記された論考よりも臨場感があり、その当時のポーランドの状況が直接的に伝わってくるなどリアリティが高い。

そして第3に、ポーランドやポーランド人に対する著者の思いや願いが込められたエールとしての側面も感じられる。現在のロシアとドイツという大国に挟まれているがゆえに困難な歴史を経験してきたにもかかわらず、勤勉な国民性によりそれらを乗り越えてきた彼らに対する温かさが読み取れる。何よりも、本書の書名にある「クォ・ヴァディス(Quo Vadis)」の言葉に、彼らの将来に対する期待が込められているといえよう。詳しくは本書の序論を読んでいただきたい。

では、具体的に本書の内容をみていく。本書の構成は第二次世界大戦後のポーランドの節目により区分された3時期に大別され、第1部は東西冷戦から1989年の東欧革命まで、第2部は東欧革命後からEUに加盟する2004年まで、そして第3部はEU加盟後から現在(2015年)までとなる。このように、大体はそれぞれの論考が執筆された時期ごとにまとめられた構成であるが、各時期でポーランドが直面する問題・課題は異なり、それに応じてその時々著者の関心事項も変わるため、必然的にテーマごとの構成にもなっ

ている。

以下に本書の構成を示す。なお、各章題の後ろに[]で括った数字を記しているが、これはそれぞれの論考が刊行された初出の年次を表している。

序論 ヨーロッパの東、ウラルの西 [2006]

第1部 社会主義ポーランドとその動揺(東西冷戦時代～1989年)

第1部の解題と時代背景 [書き下ろし]

1 社会主義経済と地域的不平等—ポーランドを事例として— [1988]

2 現存社会主義と地域的不平等—その理念と現実— [1986]

3 ポーランドからみた東欧革命 [1990]

4 東欧の地域政策—均等発展論批判— [1980]

5 GOPの70年 [書き下ろし]

6 ポーランドの農業—農業集団化と小農経営のはざままで— [1989]

7 ポーランドの環境問題—GOPとクラクフ地域を中心として— [1991]

第2部 市場経済体制への移行と苦悩(1989～2004年)

時代背景:ポーランドの現在(いま)は「円卓会議」で決まった [書き下ろし]

1 ポーランドからみた東欧「民主改革」 [1991]

2 ポーランドからみたEU加盟 [2003]

3 ポーランド国境の地政学—東部国境の3つの意味— [2007]

4 EUの東方拡大と東中欧・ポーランド [2002]

第3部 EU加盟とポーランド地政学(2004年～)

時代背景 [書き下ろし]

1 EUの東方拡大とポーランドの「ヨーロッパ回帰」—「EU25」の現場で考える— [2004]

2 ポーランドのヴェトナム人—移行期社会におけるインフォーマル・マーケットの空間的パターンの変化— [2005]

3 ふたつの顔をもつヴェトナム人社会—ポーランドのヴェトナム人— [2005]

4 「屈せざる人びと」—現代チェチェンの動態地誌— [2005]

5 トヨタの中欧戦略とその帰趨 [2015]

補論 ポーランドの地理学 [2012]

まず、各時代のポーランドについて読み解くにあたり、序論にてポーランドを理解するための見方や捉え方が示されている。具体的には、複数の時間軸で捉え、複数の空間区分の中にポーランドを位置付けて理解する必要性について論じられている。

第1部では社会主義体制下のポーランドの産業や地域政策についての論考がまとめられている。とりわけ、第1部の1(以下、1-1と記す)や1-2、1-4では工業を中心とする地域開発について論じられており、社会主義の理念である均等的な地域開発(均等発展論)の内実は石炭や鉄鉱石など資源分布に基づく工業立地や、旧ソ連の地政学的支配の影響に規定されたものであり、現実的には地域的な格差(不均等, 不平等)を前提とした地域政策を採らざるを得なかった実態が明らかにされている。そして、上記に関連して地域的な格差の実態・変化(1-1、1-2)や工業地帯の動向(1-5、1-7)、工業化による環境問題(1-7)、農業の変遷(1-6)についても論じられており、社会主義時代のポーランドの実態が克明に記されている。

次に、第2部では東西冷戦体制が崩壊し、ポーランドが市場経済を導入してからEUに加盟するに至るまでの移行期に関する論考がまとめられている。まず、第2部冒頭の「時代背景」(2-0)では、いわゆる東欧革命と称される東ヨーロッパ諸国の民主化への動きについて、ポーランドの動向を中心に1970年代以降の状況が描かれている。とりわけ、当時のキーパーソンであるヤルゼルスキを通じて、ポーランドが民主化に至る動向が分析され、当時の政治および社会に対する再評価が試みられている。また、東欧革命後の政治的混乱(2-1)やEU加盟に至るまでの動向(2-3、2-4)についてまとめられているだけでなく、ポーランドがEUに加盟する意味について、ポーランドやEU、ヨーロッパ、少数民族の居住分布など形式地域と実質地域の両面から、そして複数の空間スケールにおいて地政学的に考察がなされており興味深い。この部分に、本書が単なる地誌にとどまらない特色が表れているといえよう。

そして、第3部では、EU加盟後のポーランドの経済や社会について詳述されている。EU加盟によって地域構造やポーランドの位置付けが変化し、ポーランドへの移民流入が著しい状況が報告されている(3-0、3-2、3-3)。特に、ポーランド国内の社会および経済において大きな比重を占めるようになってきたヴェトナム人コミュニティについて、主として商業や流通といった経済的観点からその動態が分析されている(3-2、3-3)。さらに、より近年の動向として、日系企業の進出状況についても報告がなされており、民主化ならびに市場経済体制を経た現在のポーランドの状況が記されている。

また、補論として、ポーランドの地理学教育および

地理学界の特色がまとめられており、その時々々の政治・社会に対応する形で同国の地理学が発展を遂げてきたことがよく分かる。

紙幅の都合上、本書の内容については概略しか記すことができないが、これだけでも冒頭で記した本書の側面(特色)が分かっていただけだと思う。そして、その特色こそが本書の高い価値を示すものと考えられる。

最後に、蛇足ではあるが、本書に対する評者の要望について記す。本書は論文集的な形式をとっており、それぞれの論考は独立したものであるがゆえ、各論考(各章)の関係性が分かりづらい。各部ごとには著者の解題による説明がなされているとはいえ、本書全体を通しての解題・解説もあつた方が、評者のようにポーランドについて馴染みの薄い者にとっても、それぞれのテーマや事象、そして各時代を把握する手助けになるのではと考える。また、3-4におけるチェチェンの動態地誌が他のポーランドに関する論考に混じって本書に採録されている意図についても説明がほしいところである。とはいえ、これらの点はあくまで評者の要望であり、当然ながら、ポーランド地誌の専門書として、そしてポーランドに関するルポルタージュとしての本書の高い価値を損なうものではない。

(小原文明)

